

“地域一体で村おこし”の基幹施設

## 地底博物館 鯛生金山

編集部：Mt.1

### 目次

1. 施設データ
2. [自然豊かなスポーツ&リゾート観光地](#)
3. [「佐渡」「尾去沢」の先行オープン施設を参考](#)
4. [携帯解説機「マグシーバー」を装着して出発](#)
5. [近代鉱山の大型機器展示がリアルで迫力満点](#)
6. [小説の舞台にもなった金山](#)
7. [明治以前の採掘も再現](#)
8. [一億円の黄金鯛を展示](#)
9. [分かりやすい資料館、アイデア満載のお土産コーナー](#)
10. [自然を楽しむ施設を整備予定](#)

### 1. 施設データ

所在地：大分県日田郡中津江村大字合瀬3750  
 駐車場：大型22台、普通車101台、身障者用3台、計126台  
 電話：0973-56-5316  
 FAX：0973-56-5336  
 Eメール：kinzan@vill.nakatsue.oita.jp  
 設立：昭和58年  
 交通：大分自動車道「日田」ICから車で約60分  
 利用料金表：

		一般	団体（20名から）
入坑券	大人・大学生	1,000円	900円
	中・高校生	800円	720円
	小学生	500円	450円
砂金採り体験券		600円	550円
セット券 (入坑券+砂金採り)	大人・大学生	1,400円	1,300円
	中・高校生	1,200円	1,100円
	小学生	1,000円	900円
体験券	わさび加工	1,000円	完成品即日持帰り 焼き物は後日受取り 又は宅急便
	こんにゃく加工		
	鯛生焼	1,000円から	
	草木染		

取材日：2001年10月23日

ホームページ：<http://www.vill.nakatsue.oita.jp/~taiogold/>

所在マップ



[マインパーク取材一覧へ](#)

[次ページへ](#)



空間  
通信  
トップ

## 2. 自然豊かなスポーツ&リゾート観光地

鯛生金山は、北部九州のほぼ中央、福岡県と熊本県の県境に位置する大分県中津江村に位置する。面積の約90%を林野が占める山村であり、隣接の前津江村、上津江村とともに、津江山系県立自然公園に指定されている。周囲は阿蘇山をはじめとする観光地や温泉地が多数存在する。

中津江村といえば、2001年11月に「2002FIFAワールドカップ」に出場するカメルーン代表のキャンプ地にほぼ決定した（2002年1月現在）。村を挙げての歓迎ぶりがマスコミに大きく取り上げられていたものである。ちなみにキャンプ施設となる「鯛生スポーツセンター」だが、鯛生金山から数キロに位置し、5面のグラウンド、ジョギングコース、体育館、プール、宿泊施設などを完備する立派な施設である。

さて、鯛生金山だが、「道の駅“鯛生金山”」（注1）としての役割も果たしている。そして山ひとつ隔てて、オートキャンプ場とケビン（ログハウス）16棟、テニスコート等を持つ「鯛生家族旅行村」も整備されており、同山閉山後の再生復興産業としてスポーツ&リゾート観光地のインフラを整備して、地域の活性化を図ったプロセスがよくわかる。（周辺案内図参照）

### ■周辺案内図



注1：

「道の駅」は、国土交通省の許認可制で、定義は以下の通り。

中核施設は、市町村等が各種の補助金を活用して整備し、道路管理者は駐車場、休息所等を整備し、申請に基づき登録。

主な採択の条件

- 主要な幹線道路に接していること
- 駐車場20台以上、便器10器以上、公衆電話が設置され、これらが24時間利用できること
- 女性、年少者、高齢者、身障者などに配慮していること
- 案内所では多様な情報提供ができること

以上の条件を満たした施設が、日本全国に649カ所（2001年12月現在）設置されている。

「<http://www.1k.mesh.ne.jp/michinoeki/>」

### 3. 「佐渡」「尾去沢」の先行オープン施設を参考

鯛生金山は、明治27年、干魚の行商人が拾った石から始まった。その後、外国人経営者による近代技術を駆使した大規模な金山として栄え、その周辺には事務所、病院、小学校、配給所、倶楽部、山神社などが設備され、鉱山町を形成した。（略年表参照）

「鉱脈の上部は掘り尽くしたことから、どんどん下へと掘り進み、その深さは540メートル、海拔0メートルまで掘り進んでいます。しかし、この辺りは地下水が多く、排水のための費用がかさんで、採掘コストは、市場と見合わなくなりました」（鯛生金山観光管理事務所長 吉本博則氏以下同）と閉山の経緯を語る。

それがどうやって、観光坑道としての遺構活用の道を歩むことになったのか。

「昭和47年に閉山が決まり、金山跡のすべてが中津江村へ寄贈され、中津江村の所有となりました。その活用方法は酒蔵など、いろいろアイデアはありましたが、観光坑道として、みんなに見てもらおうというアイデアを出したのは、当時の村長でした。そこで、観光坑道として先行オープンしていた『佐渡』、『尾去沢』を見学に行って、その内容を検討し、昭和58年のオープンにこぎつけました」。つまり、先行したマイパークを参考とした“習作”だったわけである。

オープン以来18年で、累積来場客数は約415万人。「これは、坑道へ入った客数で、道の駅だけの利用客数はカウントされていないため、その約倍の800万人と見えています」と認識している。入込のピークは夏休みとゴールデンウィークで、来場客は福岡県からが最も多く、続いて熊本、大分の順になる。また、「近隣の温泉や観光地の周遊コースとして、阿蘇山、菊池溪谷、杖立温泉などで一泊して、翌日来場というパターンが定着しているようです。また、雨が降ると、目的地を変更して、ここへ来られることも多いです。雨に強い施設ですね（笑）」と周遊コース化されていることを強調する。

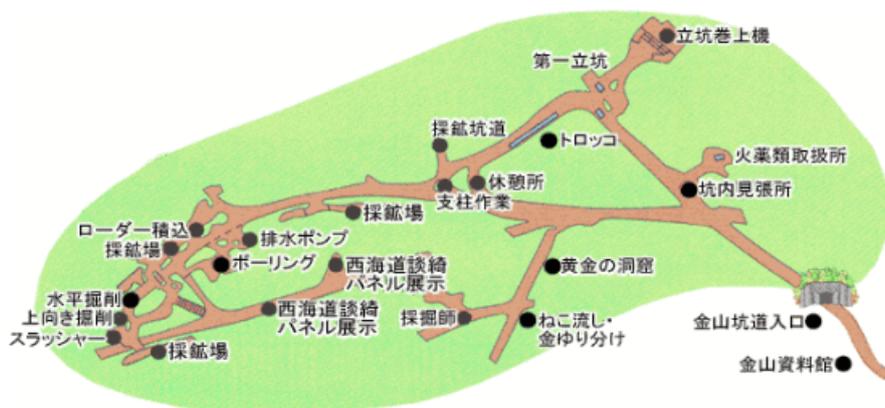
#### ■略年表

年	主なできごと
明治	27年 行商人が拾った小石から、3号脈の路頭発見
	31年 田島氏と南郷氏により、採掘開始。鯛生野鉱山と名付けられる
大正	7年 英人ハンス・ハンター氏により、近代的操業開始。鯛生金山（株）となる
	14年 久原房之助氏の経営となる
昭和	4年 木村鏝之助の経営となる
	12年 鯛生産業K.K.と改め、年産金2.4t、銀20tに達し、日本第一位の金山となる
	18年 金山整備令により休山、帝国鉱業K.K.に引き継がれる
	24年 新鉱発K.K.に引き継がれる
	31年 鯛生鉱業を創立し、操業開始（住友金属鉱山の子会社）。坑内下部排水作業開始
	33年 大口鉱業K.K.と合併、鯛生鉱業K.K.鯛生鉱業所として新発足
	35年 250t/日処理の青化精錬所を完成、製錬操業再開
	42年 坑内最下底部まで排水作業完了、下部採掘に移る
	43年 周辺地区探鉱に重点を置く
	45年 探鉱の成果なく鉱量枯渇のため休山
47年 確たる鉱脈を発見できず閉山	



## 5. 近代鉱山の大型機器展示がリアルで迫力

### ■坑道マップ



マグシーバーを渡された受付から坑道入口までは徒で歩約3分、両側はうっすらと紅葉を始めた雑木で整地され、丸太で入口を補強した古い坑道に（入ることはできない）、トロッコを突っ込ませた格好の展示もあり、臨場感を演出している（写真4）。やがてトラック1台が楽に通れる規模の石造りの立派なトンネルが見えてくる（写真5）。

操業当時、実際この坑口は、鉱石や坑夫を乗せたトロッコ電車が行き来していたという。これほどりっぱなトンネルであれば、観光でもトロッコ電車が入っていった方が、気分が盛り上げるのに・・・などと勝手に思っていると「オープン前は、トロッコ電車で入坑する計画もあったのですが、法規制やコストから断念し、歩いて入ることになりました」という。残念。

観光坑道の中は、水滴防止や安全対策のためか、白いトタンで天井、左右の全面を覆った近代的なトンネルの造作で“岩肌ゴツゴツ”的ではない。ちょっと拍子抜けしていると、すぐにマグシーバーからナレーションが聞こえてくる。

その解説を聞きながらやがて「坑内見張所」へ到着する。すると、トンネル内は一変し、岩肌がむき出しとなる。そこから道は二又に分かれ、交差点の壁には大きな案内図を掲示してある。1周約800mの坑道探検は、右が順路、左は帰り道という表示。早速順路に沿って先へ進む。

最初に登場するのは「坑内見張所」。ここは産出物の金や銀の持ち出しを防止するため、坑夫たちが毎日点検を受けて入出坑していた場所である。

マネキン人形を使って、リアルに再現・・・と思ったら、立っている人形の顔はひげを生やした西洋系のいい男（写真6）。「あれっ？」と

写真4：遺構をそのまま利用した演出



写真5：石造りの立派な入坑口



写真6：近代操業の創始者“ハンス・ハンター”



写真7：どう見てもデパートのマネキン！？

思ってもよく見ると、『鯛生金山の近代的操業を始めたイギリス人“ハンス・ハンター”』であるという説明書きがある。「なるほど」と納得していると、横のカウンターに座っているマネキン2体の顔付きもまた西洋系(写真7)で、どうしても“デパートのマネキン”にしか見えない。その隣にある「更衣室」に置かれたマネキンの顔は東洋系で違和感はない(写真8)。

ハンス・ハンターは仕方ないにしても、鉱夫もまたバタ臭い“いい男”というのには失笑を禁じ得ず、現実感がない。皆さんは写真を見てどう思われるか？

次は「第一立坑」。10m四方の広い空間が現れ、「立坑巻上機」と書いた大型の機械が設置され、そこからワイヤーロープが斜め上方に伸びている(写真9)。そしてその前方には、エレベーターが設置してある。ここから深さ510mまで立坑が続いているため、このワイヤーにより採石や人の上げ下ろしをしていた場所である・・・とマグシーバーから声の解説が入る。

実はこのマグシーバーは、ゾーンごとに説明や効果音、再現ドラマ仕立て解説などが自動的に流れ、自然と目の前に出てきた光景や展示の理解を深められる。丁寧で飽きがこないような配慮だろうが、絶え間なく音が流れているため、これが意外とうるさく感じるのだ。複数人で歩いていると、会話がしづらいのも難点である。何か改善が欲しいと思うのは贅沢か・・・。

さらに奥へ進むと、坑内で実際に走っていたトロッコ電車と鉱車(ダンプトラック)が展示してある(写真10)。同坑道は近代鉱山の遺構なので、坑道を大きくして、このような近代機器を活用した効率的な採掘を行っていたのである。大型機器の展示(「ボーリング」「水平掘削」「上向き掘削」「排水ポンプ」等)は他にも多数あり、リアルで迫力がある(写真11)。

また途中の坑道の交差点となる広い場所では、創業当時の写真や坑道構造・掘削法解説をパネルで展示(写真12)、また実際に使われていた掘削機器も並べて、分かりやすさに配慮している。なかでも明治以降の近代鉱山として栄えた山ならではの写真はとてリアルであった。またベンチを設置した休憩所も設け、障害者やお年寄りにも配慮していることにも好感を持った。

坑道の再利用として特産となっているのが、坑道貯蔵酒「黄金浪漫」(写真13)。坑道内は年間一定気温で多湿のため、酒類熟成には最適の貯蔵庫だという。そこでカメに詰めた焼酎をここで熟成させて「黄金浪漫」という名称で販売しているのである。これは、福岡県側の矢部村にある坑道部分でも実施されている(<http://www.kitaya.co.jp/kinzan.html>)。

写真11：近代鉱山を象徴する大型機器も展示



写真8：こちらは、典型的な東洋人



写真9：第一立坑の巨大なワイヤー巻上機



写真10：トロッコ電車、ダンプトラックは迫力満点

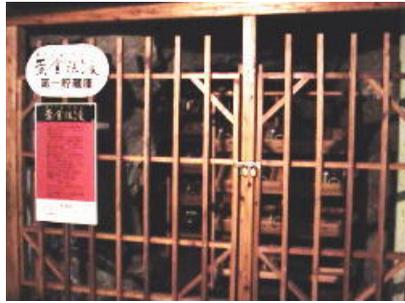




写真12：近代鉱山ならではの当時の写真や、坑道構造解説パネルは、シンプルな構成でわかりやすい



写真13：坑道貯蔵酒「黄金浪漫」の貯蔵庫



[←前ページへ](#)

[次ページへ→](#)



空間  
通信  
[トップ](#)



## 7. 手作業による採掘も再現

ここから先は、明治に機械化される前の採掘状況を、マネキンにより再現している。ノミと鍬で手掘りする「タヌキ掘り」や掘り出した鉱石を細かく砕く「砕女（かなめ）」、細かく砕いた鉱石を水に流し金と土に分ける「金ゆり分け」など、人形の横に解説板を設置し、マグシーバーとともに分かりやすく解説している

(写真16)。「西海道談綺」の時代劇の流れからこのようなコーナーが設けられたと思うが、展示順序が時代を逆行しているようで、違和感があった。確かにこの金山は明治以降に発見され、はっきりした歴史は近代鉱山からであることから、このような順番になったと思うが、逆に「昔はこのような手作業で苦勞したが、近代鉱山の鯛生金山においては、このような大型機器を投入し・・・」などとストーリーを組み立てた方が、一般的には分かりやすいのではないだろうか。

写真16：「タヌキ掘り」「砕女」「金ゆり分け」など、明治以前の採掘を再現



「砕女」



「金ゆり分け」



[前ページへ](#)

[次ページへ](#)



## 8. 一億円の黄金鯛を展示

最後に登場したのが「黄金の洞窟」。所々に金箔を貼った洞窟に純金製の鯛が2匹展示しており(写真17)、横の説明書き(このパネルも金色)には「2匹で50kg、一億円」と書いてある。もちろん、鯛生金山の「鯛」に因んだものである。

この黄金の鯛は1991年平成4年村単独事業(金山の事業費)により作られた。

そしてその横にはなぜか水戸黄門らしき動くマネキンが、黄金鯛の由来を解説している(写真18)。著作権等から、明確に「水戸黄門」とは表記していないが、これは誰が見ても「水戸黄門」である。

ちなみに、「鯛生」という地名の由来だが、--建武・延元年間(1334~1339年)、この地方の豪族であった田島舎人は、肥後の菊池家と縁組みをした。嫁御寮の輿は、山を越えて田島の居城に着いた。菊池家では、婿になる田島舎人に何か珍しいものを贈ろうと、活きた雌雄二尾の鯛をめだたかれよと引き出物にした。ところが、この地に着くとその鯛は躍り上がって、ふたつの岩石の上にしっかりと付着してしまった。大小の男鯛と女鯛は互いに向き合い、『鯛生石』と呼ばれるようになった--という伝説をベースとする。

現在、男鯛の上には大きな木が茂ってその姿を見ることはできないが、女鯛は地名の由来を物語るように残っているという(鯛生金山ガイドブック「鯛生金山物語」より)。

黄金鯛の横には「願かけ鯛」と称してブロンズの鯛2匹が設置されている(写真19)。説明書きを読むと、鯛の前にある水槽の中にある金箔をすくって、願かけ鯛に貼ると、縁結び、商売繁盛の願いがかなうという。なかなか凝った演出であるが、“1回50円”という表示と料金箱がしっかり設置してあった。

この50円という価格設定の根拠はわからないが、“願をかける”という行為から賽銭箱を設置して“料金”ではなく“賽銭”とした方が、御利益がありそうだし、参加率も上がるのではないだろうか。

そもそもこの「黄金鯛」「願かけ鯛」コーナー自体に賛否両論あるとは思いますが、“金山+鯛生=黄金鯛”という誰にも分かりやすい連想と、新名所としての意気込みは感じられる。

しかし、水戸黄門は意味がわからない。新しい観光名所として一時的な話題づくりではなく、恒久的な名所になるような造り込み、工夫が欲しいところである。

先を進むと、最初に来た案内図の三叉路へ到着。入坑からゆっくりと歩いて約60分、これで坑道探検も終了となる。

写真17：一億円の黄金鯛



写真18：なぜ、水戸黄門？



写真19：ブロンズ製の「願かけ鯛」



## 9. 分かりやすい資料館、アイデア満載のお土産コーナー

坑道を出てレストハウスへ向かい、その手前の「金山資料館」へ(写真20)。ここは金山にまつわる歴史や当時の機器・道具類、鉱石、地質鉱床図などが展示されている。

明治以降の比較的新しい金山であったため資料も多く、全盛期の集落村ジオラマ、坑道の立体模型なども展示され(写真21)、小規模ながら非常に分かりやすい施設であった。

資料館の隣はレストハウスのお土産コーナー。前述のように、地場名産の“わさび”“こんにゃく”の加工品、草木染製品、そして「鯛生焼」と記した焼き物が販売されている(写真22)。

「『鯛生焼』は新しい名産として、金採掘時に出た鉱滓(土などのカス)を粘薬(うわぐすり)として利用して焼いた、独特の風合いを持つ焼き物です。駐車場の向かいにある精錬所(写真23)を現在「鯛生焼」の窯として利用し、焼き物体験施設としても利用しています。もちろん自分でつくった作品は後日持ち帰り、またはお送りしています」と精錬所、土の再利用を語る。

これは再利用として非常に良い例で、新しい名産として育てて欲しい商品である。

さらに坑道内に貯蔵されていた「黄金浪漫」(写真24)、金の延べ棒のパッケージに入った金粉入りヨウカン「金の延べ棒」(写真25)と金箔入り麦焼酎「鯛生金山」(写真26)、地元名産のゆずのリキュール「黄金のしずく」(試飲も実施)(写真27)、そしてご愛敬でレジ横にはタバコ「ゴールデンバット」(写真28)など、“金”にこだわったおみやげ物がずらりと並んでいる。その他、地場名産品が並んでいたのは言うまでもない。

“子供だまし”のようだが、“金山=金の延べ棒”というパッケージは、とてもわかりやすい。こういうシンプルなデザインに、名産をパッケージするのが、土産品としての正統ではないだろうか。特に「鉱山」のように、いわば“食”のイメージと結びつきにくい施設資源のお土産としては、ある種の洒落や冗談をスパイスとして、中の食は“味”にサプライズを仕掛けるための工夫が望まれると考える。

写真20：レストハウス横の「金山資料館」



写真21：網の目のように掘られたことが一目瞭然にわかる坑道の立体模型

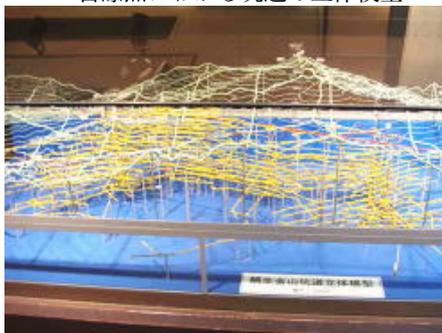


写真22：鉱滓を粘薬に利用した「鯛生焼き」



販売

写真23：精錬所跡の「鯛生焼き」の窯



写真24：坑道貯蔵酒「黄金浪漫」も



山」

写真25：金粉入りヨウカン「金の延べ棒」



写真26：金箔入り麦焼酎「鯛生金



写真27：ゆずりキュール「黄金のしずく  
ンバット」も・・・



写真28：レジ横には「ゴールド



[前ページへ](#)

[次ページへ](#)



